The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	若年層関西方言話者のカジュアルスタイルにおける「ネ」の使用
Author(s)	高木, 千恵
Citation	阪大日本語研究. 2020, 32, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76116
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』32（2020）

若年層関西方言話者のカジュアルスタイルにおける「ネ」の使用

The Use of the Particle *ne* in the Casual Style of Young Kansai Dialect Speakers

高木 千恵
TAKAGI Chie

キーワード：間投詞、間投助詞、終助詞、認識の提示、ネ

要旨

本稿では1997年に収録された関西の大学生のカジュアル談話を資料として談話に現れた「ネ」の使用実態を探った。関西方言のカジュアル談話では「ナ」の使用がデフォルトとなることが期待されるが、分析の結果、対象とした12の談話のうち10談話にネの用例がみられること、ただしネを多用する話者はわずかで、ネの使用率が10％に満たない話者が24名中15名に上ることがわかった。接続については、間投助詞のネではフィラー・とりたて助詞・接続詞を前接語とする例が半数以上を占め、終助詞のネでは副詞・断定辞・形容詞・接続助詞に接続する例が多くみられた。またネは「話し手の認識を聞き手に示す」という用法で用いられ、聞き手の反応を求める用法はほぼみられなかった。加えて、ナとの互換性のないネの用法も明らかとなり、これがカジュアルスタイルにおけるネの使用の一因であることが示唆された。ただしネを多用する話者の場合は、カジュアルスタイルにおける方言形と標準語形の併用という全体的な傾向の一環としてネの使用があるということを指摘した。

1. はじめに

本稿では、関西方言話者がカジュアルなスピーチスタイルで使用する「ネ」に注目し、談話に現れたネとナを対照しつつ、その使用実態を明らかにする。関西方言では、標準語の「ね」「な」に対応する形式はナであり、おおむね、話者の社会的属性に偏りなく使用されると言われている。これに対してネは、関西では標準語（共通語）的、あるいはナに比べて文体が高いとされることが多く、その文体の高さからていねいなもの言いを好む女性がよく用いるという指摘もある（2節参照）。しかしながら関西方言話者による親しい友人とのカジュアルな会話を観察すると、同一話者が同じ会話のなかでナとネの両方を使用しているケースが散見される。そしてそのネの使用は女性だけでなく男性にもみられるのである。本稿では、同一談話内でナとネが併用されるケースに注目し、カジュアル談話におけるネの使用実態を記述したい。

以下、本稿の構成は次のとおりである。まず2節において、関西方言におけるネの位置づけに

ついて先行研究に基づいて整理し、問題のありかと本稿の目的を提示する。続いて本稿で扱う資料と分析の方法について述べ（3節）、カジュアルな談話におけるネの使用実態を品詞ごと・話者ごとに分けて分析する（4節）。5節では談話に現れるネの用法について標準語の「ね」を参考に分析し、ネを多用する話者の特徴については6節で考察する。最後に7節で本稿の内容をまとめ、今後の課題を述べる。なお本稿でいう「関西方言」とは京阪神を中心とした関西中央部で使用される地域的変種を指すものである。またネとナについては、文を構成する成分につくものを間投助詞、文につくものを終助詞として区別し、単独で使われるものを間投詞とする（詳細は3節を参照）。ネ・ナはともに末尾母音が伸びてネー・ナーとなることがあるが、本文では原則としてネ・ナで代表させる。ただし先行研究の引用や用例の分析においてはこの限りではない。

2. 関西方言におけるネの位置づけ

2.1.「なあ」「ね」相当の関西方言形

はじめに、国立国語研究所が1999年から2006年にかけて刊行した『方言文法全国地図』（以下、GAJ）の第4～6集によって標準語の「なあ」「ね」に相当する関西方言形を確認しておきたい。GAJには間投助詞・終助詞の「なあ」と終助詞の「ね」を扱った次の図が収められている。

（1）187図「おもしろかったなあ」
（2）189図「行ったなあ」
（3）228図「行きたいなあ」
（4）343～348図「役場になあ、行ったらなあ」（A場面・B場面・O場面）
（5）322、324、326図「寒いですね」（A場面、B場面、O場面）
（6）328、330図「本ですね」（A場面、B場面）

間投助詞を扱っているのは（4）の343～348図で、ほかはすべて終助詞が対象になっている。（4）～（6）にあるA場面・B場面・O場面というのはそれぞれ「近所の知り合いの人にむかって、ややていねいに言う」「この土地の目上の人にむかって、ひじょうにていねいに言う」「親しい友達にむかって言う」と設定された場面である。

これらの図における関西各地の回答をみると、その多くでナーがまとまって回答されている。A場面やB場面などていねいなもの言いをする場面においてはネーも出現しているが、O場面と同じナーが回答されている地域も目立つ。全体として関西では、標準語の「なあ」「ね」に相当するものとしてナーが使われていること、ナーとネーで文体差があるとみられる地点も

あるが丁寧体とともにナーが使われる地点も多いことが確認できる。

2.2. 関西におけるナとネのちがい

では次に、関西各地の方言を概説した楳垣編（1962）によって各地方言におけるナ・ネの記述を確認する。3節で述べるが、本稿で扱うデータの話者の出身／成育地は滋賀・京都・奈良・大阪・兵庫の各府県である。楳垣編（1962）によれば、この5府県のうち奈良を除く各地ではナを用いるのが一般的である。奈良は北部と南部とで違いがあり、山添村を除く北部の大部分ではナが一般的であるが、南部ではナがぞんざいな表現と捉えられており、代わってノがよく用いられるという。本稿で扱う奈良県の話者はいずれも北部出身であるので、ナが一般的に使用される地域ということになる。

一方のネについては、楳垣編（1962）には文体差や変種の違い、使用者属性の違いなどの指摘がある[1)]。文体差としては「やや改まったていねいな感じのする語」（京都、p.296）といった記述があり、変種の違いについては「共通語化」（大阪、p.485）、「輸入された語」（兵庫、p.555）とする指摘がある。ただし「京都市あたりのネエは、必ずしも共通語の影響をうけたものではなく、本来的な語形」（p.296）との指摘もある。また使用者属性として「若い女性層に主として使われる」（大阪、p.485）、「ナ・ナアを使わない［筆者注：ネを使う］婦人も都会地には多い」（兵庫、p.555）とする記述がある。このように、ネを標準語（共通語）的と捉えるか否かには関西内部で地域差があるものの、文体差については今回扱う話者の出身／成育地において共通しており、ネはナよりも文体的に高い価値を有している。そしてそのことが、使用者属性の偏りと結びつけて捉えられている。

次に、関西の若い世代におけるナ・ネの使用意識については尾崎（2003）によって知ることができる。尾崎（前掲）は関東と関西とで使用者属性に違いのある表現を取り上げ、その表現の使用者が互いの地域でどのように評価されるかを、大学生を対象としたアンケート調査によって調べている（調査は2001年）。そのなかで間投助詞の「なぁ」「ねぇ」について、関西では男女ともに「なぁ」を使用するという回答の占める率が高いこと（男性88％、女性82％）、「ねぇ」を使用するという回答は男女ともに少ないが、その回答率に男女差があること（男性10.6％、女性30.4％）を指摘している。

このほか、実際の会話データの分析から関西における間投助詞ナ・ネの文体差を指摘した研究もある。篠原（2005）では、京都市で生まれ育った20代男性のカジュアル場面とフォーマル場面の二つのデータを比較し、カジュアル場面ではナが、フォーマル場面ではネがもっともよく使用されていることを指摘した。加えて、フォーマル場面において丁寧体と共起せず使用されるネの使用率が高いことから、当該の話者にとってはネそのものがフォーマルさを示すマー

カーとなっていると考えられるとしている。同様に大阪市方言話者のスタイル切換えを扱った細谷（2004）においても、若年層男性話者がネをナよりも文体の高い形式として使用していることが指摘されている。

2.3. 問題のありかと本稿の目的

ここまでみてきたように、関西では標準語の「な」「ね」に相当するものとして基本的にナが使われるということが、意識の面からも、また実態の面からも指摘されている。また概説書ではネについて、標準語（共通語）的であること、あるいはナに比べると文体的価値が高いこと、若い女性に使用される傾向があることなどが記述されている。こうした点は、多くの関西方言話者に共通の認識であろうと思われる。ただ実際にはカジュアルスタイルでもネの使用が散見される。次例（7）は男子大学生、（8）は女子大学生による友人どうしの会話にみられた例である[2)]。

（7）［タカシが、テストや課題が多いとショウジに愚痴をこぼしている］

212ショウジ：あー。なんか、話 聞いてるとさ、A学部って大変じゃない？

213タカシ　：大変やで。ちゅうか、B学［部］も大変やで、きっと。

→214ショウジ：いつごろ大変になるんやろナー。

215タカシ　：だから実験実習入ってきてレポートとか書かされたら絶対、

→216ショウジ：あ それが大変になるねんナ、んな三回からやネ。　［9708M］[3)]

（8）［チナツは京都を「学生の街」というが、タマヨはその表現を疑問に思っている］

975タマヨ：そう言うんやけどー、

976チナツ：うん、

→977タマヨ：あんまりそういう、実感湧かへんけどネ、うん。

978チナツ：あ ほんまにー、場所にもよるんかな、ほんなもうほんまに大学のそばっていう、とこ、だけ限定されるんかな。

→979タマヨ：そうなんかもナ、わからん、けど、なんか、

980チナツ：うーん、でも京都って大学多くない？

981タマヨ：そう大学、

982チナツ：私立が多いんかな、

→983タマヨ：うん、多い多い。うん、けっこう、あるナー。　［9703F］

上例では、文体の低いカジュアルスタイルにおいて、同じ話者によってナとネが使用されている。実は、篠原（2005）や細谷（2004）の結果にもこのようなネの使用が1例ずつ現れているのだが、どちらの論文でもこの点には言及されていない。

ナの使用がデフォルトといえる関西のカジュアルスタイルにおいて、ネはどのように使用されているのだろうか。本稿では、1997年に収録された関西の大学生どうしのカジュアル談話を資料として、ネの使用される言語内的な条件や用法上の偏りの有無を整理し、カジュアルスタイルにおけるネの使用実態の一端を明らかにしたい。具体的には、次の（a）～（d）について分析・考察する。

（a）全体的な傾向：ネの使用頻度、使用率（→4.1節）

（b）言語内的な条件：ネの品詞、前接語のタイプ（→4.2節、4.3節）

（c）用法上の特徴（→5節）

（d）話者の特徴：ネを多用する話者のことばの志向性（→6節）

3. データと分析の方法

3.1. 本稿で扱う資料

本稿では、1997年に収録された関西の大学生のカジュアルな談話を資料として用いる。このデータは筆者が過去にネオ方言の実態記述を目的として収集したもので、その分析は高木（2006）としてまとめた。本稿ではそのデータのうちの12談話を分析対象とする。話者はいずれも1970年代後半生まれ（談話収録当時19～23歳）で、滋賀・京都・奈良・大阪・兵庫のいずれかの府県に在住する関西方言話者計24名（男性12名・女性12名）である。談話は同性2名の親しい友人どうしによる40分前後の自由会話で、事前に了解を得て録音されている。

話者情報は表1・表2に示すとおりである。表中の談話IDは［収録年・談話個別番号・話者性別記号］からなっており、末尾のM/Fは会話参加者の性別（Male男性、Female女性）を表す。たとえば「9701M」は「1997年収録・個別番号01番・男性どうしの会話」のことである。また話者IDはいずれも仮名である。談話ID・話者IDともに高木（2006）と共通のものを使用している。なお居住府県については、大学進学によって一人暮らしをしている話者の場合は実家のある府県を記している。

表1・表2にあるとおり1～2歳の年齢差があるペアもいるが、いずれも大学の同級生で仲が良く、年齢差に起因することば遣いの違いはみられなかった。

先にも述べたが、本稿で扱うのは1997年に収録された当時の大学生の会話データである。今から25年近く前に収録された音声資料であるため、結果の解釈に慎重にならざるを得ない部分もあると考える。この資料から得られた結果が必ずしも現在の関西若年層における使用実態と一致するとは限らないし、2020年の時点で40代半ばになっている調査協力者たちが現在も同様の使用実態を示す保証はない。得られた結果は1997年当時の関西の大学生におけるネとナ

表1　話者情報（男性）

談話ID	話者ID	生年	年齢	居住地
9701M	タカフミ	1977	19	兵庫県
	ケンイチ	1975	21	大阪府
9704M	イオリ	1977	19	滋賀県
	トオル	1977	19	奈良県
9705M	カズヨシ	1977	20	大阪府
	リイチ	1976	21	大阪府
9708M	ショウジ	1976	21	兵庫県
	タカシ	1977	19	大阪府
9709M	ミツル	1977	19	京都府
	トモカズ	1977	19	大阪府
9711M	マナブ	1975	22	大阪府
	コウジ	1977	20	大阪府

「年齢」は収録時のもの。

表2　話者情報（女性）

談話ID	話者ID	生年	年齢	居住地
9702F	ケイコ	1976	21	大阪府
	マリコ	1976	21	大阪府
9703F	チナツ	1977	19	大阪府
	タマヨ	1977	19	京都府
9710F	チズル	1976	20	大阪府
	アユコ	1976	21	奈良県
9712F	ナツコ	1977	20	兵庫県
	チカ	1976	21	大阪府
9713F	サヤカ	1976	20	兵庫県
	ハツミ	1976	21	京都府
9714F	カヨコ	1976	21	大阪府
	アヤ	1974	23	奈良県

「年齢」は収録時のもの。

の使用実態以上のものではないかもしれないが、仮にそうであったとしても、カジュアルスタイルにおけるネの使用というこれまで注目されていなかった事象を取り上げ、その実態を明らかにすることには意義があると考えている。

3.2. 分析の方法

本稿では、談話に現れたネとナについて、話者ごとの使用状況を量的に把握したうえで、ネとナが同一談話内で併用されるケースに注目して、ネの使用される言語内的な条件やネのもつ用法上の特徴を記述する。併せてネを多用する話者の特徴についても探りたい。

まず前提として、本稿が対象とする関西方言のネ・ナをどのような品詞として扱うかについて述べておきたい。日本語諸方言を研究対象とする方言学の分野では、いわゆる標準語を対象とする現代日本語研究と同様に、文中に使われるネやナを終助詞（方言研究では「文末詞」とも）と区別する立場もあれば、終助詞の一用法（間投的用法）とする立場もある。どちらの立場にもそれぞれの利点があると考えるが、本稿では統語的な環境の違いを重視し、間投助詞と終助詞を区別する立場をとる。そしてその両者の区別について、便宜的に次のように考える。

まず間投助詞については「文を構成する成分につく」という観点から（9a）～（9d）の認定基準を設定し、このいずれかに該当するものを間投助詞とする。

（9）間投助詞の認定基準

（a）体言相当の語句につく。（例）わたしネ、やっぱりネ、

（b）格助詞やとりたて助詞につく。（例）わたしがネ、ここにもネ、

（c）用言のうち、副詞節・従属節を作る形態を取るものにつく。（例）行ったらネ、

（d）節をつくる助詞（接続助詞など）につく。（例）わかってたけどネ、

終助詞については、「文の末尾につく助詞」という観点から（10a）～（10c）の基準を立て、いずれかに該当するものを終助詞とする。

（10）終助詞の認定基準

（a）主節の述語につく。

（例）昔よく行ったネ。また来てネ。また明日ネ。たぶんあいつもネ。

（b）上記（a）によって終助詞と認定できる助詞につく。

（例）昔よく行ったよネ。

（c）主節を持たない従属節につく。

（例）褒められたらうれしいしネ。［接続助詞＋ネ］

（例）家にあったらネ。［条件形＋ネ］

（10a）の「主節の述語」には、「行く」や「行った」のような用言の文終止の形態だけでなく行為指示表現としてのテ形や連用形、断定辞を伴わない名詞、「体言＋助詞」など、さまざまなものが含まれる。いずれも、文の述語として機能している点に注目し、そのあとにつくネやナを終助詞と認定する。（10b）については、たとえば「よネ」を複合終助詞（よ＋ネ）とみるか一つの終助詞（よネ）とみるかで意見が分かれるところではあるが、いずれにしても終助詞という点では共通していることからこのような認定基準を立てた。さいごに（10c）について、話しことばでは発話文が従属節だけで作られることも多く、接続助詞のなかには「終助詞的用法」と呼ばれる用法をもつものもある。このようなものの後に付くネやナは（10b）に準ずるものとして終助詞と認定する。本稿は終助詞の「文の末尾に付く」という統語的な特徴を重視するので、用言の条件形によって文が構成されている場合なども、その後につくネやナを終助詞と認定する。結果として、（9a）（9b）と（10a）、（9c）（9d）と（10c）には形態的に同じものが含まれることになるが、文を構成する述語や主節の有無によってそれぞれの区別が可能である。なお、ネやナは他の語に接続することなく単独で使われることもあるが、本稿ではこれを間投詞として扱う。

分析にあたっては、談話に現れたネ・ナの用例をすべて収集し、独立して使用されているものを間投詞とし、前接語をもつものについては上記（9）（10）の基準に沿って終助詞と間投助詞に分類した。カナ・ヤンナ・ヨナのように（10b）に相当する形式はネ・ナ単独の終助詞とは別に扱った。また、心内発話を含め引用部分に現れたものはすべて対象外とした。

4. 関西大学生のネの使用実態

4.1. 全体の結果

分析対象とした12の談話から得られたネ・ナの用例数と使用率について話者ごとにまとめたものを以下の表3に示す。全体の傾向をみるために表3では全ての品詞をまとめて扱い、ネの占める割合の多かった話者から順に並べてある。

表3　ネ・ナ全体の使用状況

順位	談話ID	話者ID	ネ	ナ	合計	男性	女性
1	9713F	サヤカ	39（72.22）	15（27.78）	54		＊
2	9708M	ショウジ	52（36.92）	89（62.68）	141	＊	
3	9710F	チズル	11（9.91）	100（90.09）	111		＊
4	9713F	ハツミ	10（9.71）	93（90.29）	103		＊
5	9703F	タマヨ	5（6.33）	74（93.67）	79		＊
6	9714F	アヤ	4（5.63）	67（94.37）	71		＊
7	9705M	カズヨシ	13（4.73）	262（95.27）	275	＊	
8	9701M	ケンイチ	3（4.69）	61（95.31）	64	＊	
9	9708M	タカシ	5（3.97）	121（96.03）	126	＊	
10	9712F	ナツコ	6（3.55）	163（96.45）	169		＊
11	9711M	コウジ	1（1.75）	56（98.25）	57	＊	
12	9701M	タカフミ	1（1.69）	58（98.31）	59	＊	
13	9709M	トモカズ	1（1.41）	70（98.59）	71	＊	
14	9709M	ミツル	2（1.31）	151（98.69）	153	＊	
15	9714F	カヨコ	1（1.03）	96（98.97）	97		＊
16	9712F	チカ	1（0.56）	179（99.44）	180		＊
17	9705M	リイチ	1（0.46）	214（99.54）	216	＊	
18	9702F	マリコ	-	74（100）	74		＊
	9704M	イオリ	-	79（100）	79	＊	
	9704M	トオル	-	89（100）	89	＊	
	9703F	チナツ	-	99（100）	99		＊
	9711M	マナブ	-	108（100）	108	＊	
	9702F	ケイコ	-	108（100）	108		＊
	9710F	アユコ	-	114（100）	114		＊
合計			156	2,539	2,695		

用例数は実数、（　）内は百分率。-は用例がなかったことを表す。

表3からわかるのは、第一にネの使用に個人差があるということである。今回対象とした24名の話者のうちネの使用がナを上回ったのは1名、サヤカだけであった。72.22％というサヤカ

のネの使用率は他の話者と比べて突出して高い。使用率が2番目に高いショウジでも36.92％でサヤカの半分程度である。また24名中7名の話者にはネの使用が1例もみられなかった。残りの15名には、わずかながらネの使用があった。

第二に、ネの使用には明確な「男女差」がない。先行研究には、ネのもつ文体の高さからその使用が女性に偏るという指摘があった。表3をみると上位5位までに女性が4名おり、一見すると女性話者によく使用されているようにみえるかもしれない。しかし具体的な数値をみると第3位以下の話者におけるネの使用率はみな10％未満であり、ネの使用が女性に目立って多いとはいえない。加えて、ネをまったく使用しなかった話者7名の内訳をみても男性3名・女性4名とほぼ同数になっている。したがって少なくとも本稿で扱ったデータに限っていえば関西方言におけるネの使用にはっきりとした「男女差」は認められなかったということになる。ネの使用率の違いは集団差というよりは個人差（個人のことばの志向のちがい）を反映しているのではないかと思われるが、この点については6節で扱う。

ネの使用の有無という点からみると、24名中17名がカジュアルスタイルにおいてネを使用している。談話ごとにみると、12の談話のうちネの使用がまったくみられなかったのは9704Mと9702Fの2談話のみであり、残りの10談話では会話の参加者のどちらか一方・あるいは両方が少なくとも1回はネを使っているという結果になった。次節以降でどのような場合にネが使われているのか具体的にみていきたい。

4.2. ネの品詞

ここでは品詞ごとに分けてネの使用状況をみていく。ネの用例は全部で156例あったが、このうち間投詞としての使用が3例、間投助詞としての使用が62例、終助詞としての使用が91例であった。この91例のうち12例は「ヨネ」「ヤンネ」のような複合形式をとっていた。品詞別・話者別にみたネの使用数を表4に示す。複合形式の用例数は表5として別にまとめた。

表4をみる限り、ネの使用にこれといった品詞上の偏りはないようである。ケンイチやトモカズのように間投助詞だけにネの使用があったり、チズルやハツミのように間投助詞としてのネの使用が終助詞よりも上回っていたりするケースがある一方で、タカフミ、リイチやカヨコ、アヤのようにネの使用が終助詞に限られているケースもある。またカズヨシやタマヨのように使用数が少なくても間投詞・間投助詞・終助詞にまたがってネを使用しているケースもある。ここには、ネの使用が増えるほどに品詞のタイプが多様になるといった含意スケールのようなものは認められない。ネの使われやすい品詞というものは今回の結果から見いだせなかった。

カネやヨネ、ヤンネといった複合形式の使用状況は表5のとおりである。形態的に対応するナの形式についても併せて示す。カナとヤンナは間投詞としての用例もあったため、その用例

表4　品詞別・話者別にみたネの使用状況

談話ID	話者ID	ネ			ナ		
		間投詞	間投助詞	終助詞	間投詞	間投助詞	終助詞
9701M	タカフミ	-	-	1	1	17	29
	ケンイチ	-	2	-	2	11	26
9704M	イオリ	-	-	-	-	13	39
	トオル	-	-	-	6	14	40
9705M	カズヨシ	1	3	9	12	23	174
	リイチ	-	-	1	8	15	139
9708M	ショウジ	-	18	29	2	3	68
	タカシ	-	3	2	3	23	79
9709M	ミツル	-	-	2	-	37	94
	トモカズ	-	1	-	2	5	42
9711M	マナブ	-	-	-	-	6	58
	コウジ	-	-	1	1	5	27
9702F	ケイコ	-	-	-	7	64	24
	マリコ	-	-	-	11	24	18
9703F	チナツ	-	-	-	5	12	32
	タマヨ	1	3	1	-	11	37
9710F	チズル	-	7	4	8	44	34
	アユコ	-	-	-	9	24	61
9712F	ナツコ	1	-	5	20	49	66
	チカ	-	-	-	13	70	56
9713F	サヤカ	-	18	15	1	2	9
	ハツミ	-	7	3	2	24	46
9714F	カヨコ	-	-	1	1	52	35
	アヤ	-	-	4	11	20	24
合計		3	62	78	87	411	985

用例数は実数。-は用例がなかったことを表す。

数は各セル内の（ ）に入れて別に示した。なお、ナによる複合形式には他にカイナ（リイチの1例）とガナ（イオリの1例、トオルの2例、ショウジの2例の計5例）の用例があったが、対応するネの形式が現れなかったため表には示していない。

複合形式としてのネは用例自体が少なく、かつ単独のネを多用する話し手に使用が偏るという傾向がみられた。表5にあるとおり、ネによる複合形式はケンイチとチカの各1例を除いていずれもサヤカとショウジによって使用されている（サヤカとショウジはネの使用率1位と2位の話者である）。その一方で、対応するナの複合形式はほとんどの話者に使用がみられる。ここから、複合形式におけるネの使用はかなり限定的なものということができる。

表5　品詞別・話者別にみたネの使用状況（他の助詞との複合形式）

談話ID	話者ID	カネ	ヨネ	ヤンネ	モンネ	カナ	ヨナ	ヤンナ	モンナ
9701M	タカフミ	-	-	-	-	4（1）	6	-	-
	ケンイチ	-	-	-	1	15	6	-	1
9704M	イオリ	-	-	-	-	9	7	6	4
	トオル	-	-	-	-	21	3	1	2
9705M	カズヨシ	-	-	-	-	13	31	3	6
	リイチ	-	-	-	-	28	18	1	2
9708M	ショウジ	1	4	-	-	8	2	6	-
	タカシ	-	-	-	-	13	1	1	1
9709M	ミツル	-	-	-	-	8	3	8	1
	トモカズ	-	-	-	-	15	6	-	-
9711M	マナブ	-	-	-	-	31	4	6	3
	コウジ	-	-	-	-	14	4	3	2
9702F	ケイコ	-	-	-	-	7	3	3	-
	マリコ	-	-	-	-	12	5	-（1）	2
9703F	チナツ	-	-	-	-	24	9	9（3）	4
	タマヨ	-	-	-	-	20（2）	-	3	1
9710F	チズル	-	-	-	-	5	5	3	-
	アユコ	-	-	-	-	12	7	1	-
9712F	ナツコ	-	-	-	-	9	10	5	4
	チカ	-	-	1	-	10（1）	16	7（1）	5
9713F	サヤカ	1	2	1	1	2	-	1	-
	ハツミ	-	-	-	-	14	2	5	-
9714F	カヨコ	-	-	-	-	4	1	3	-
	アヤ	-	-	-	-	8	1	3	-
合計		2	6	2	2	985	150	78	38

用例数は実数。-は用例がなかったことを表す。間投詞としての用例数は別途（　）内に示した。

4.3. ネの前接語

続いて、ネの前接語のタイプについて品詞ごとにみていきたい。間投助詞ネの前接語のタイプを表6に、終助詞のそれを表7にまとめた。以下では対応するナの用例数は挙げず、ネの使用がみられた話者だけを表に示している。

間投助詞においてネとの共起がよくみられたのは、多いものから順に①フィラー（23例）、②とりたて助詞（9例）、③接続詞（7例）であった。なかでもフィラーとの共起が23例と用例の半数近くを占めており、かつ間投助詞のネを使用した全ての話者にその使用がみられる。フィラーの内訳は「なんか」9例、「えーと類」7例、「まあ」4例、「あの」3例であった（「えーと

類」には、「えっと」「えと」「えーっと」のほか、「うーんと」「んと」などを含めた)。具体的な用例は次節で挙げるので、ここでは割愛する。

表6　間投助詞ネの前接語

談話ID	話者ID	フィラー	とりたて助詞	接続詞	その他	合計
9701M	ケンイチ	1	1	-	-	2
9705M	カズヨシ	1	1	-	1	3
9708M	ショウジ	5	5	-	8	18
9708M	タカシ	1	2	-	-	3
9709M	トモカズ	1	-	-	-	1
9703F	タマヨ	3	-	-	-	3
9710F	チズル	1	-	3	3	7
9713F	サヤカ	7	1	3	7	18
	ハツミ	4	1	1	1	7
合計		23	9	7	20	59

用例数は実数。-は用例がなかったことを表す。

表7　終助詞ネの前接語

談話ID	話者ID	副詞	断定辞	形容詞	接続助詞	名詞	その他	合計
9701M	タカフミ	1	-	-	-	-	-	1
9705M	カズヨシ	-	-	4	2	-	3	9
	リイチ	-	-	-	-	-	1	1
9708M	ショウジ	3	12	8	1	-	5	29
	タカシ	1	-	-	-	-	1	2
9709M	ミツル	1	-	1	-	-	-	2
9711M	コウジ	-	-	-	-	-	1	1
9703F	タマヨ	-	-	-	1	-	-	1
9710F	チズル	2	-	-	1	-	1	4
9712F	ナツコ	1	1	1	1	1	-	5
9713F	サヤカ	4	4	1	2	3	1	15
	ハツミ	1	-	-	-	-	2	3
9714F	カヨコ	1	-	-	-	-	-	1
	アヤ	3	-	-	-	1	-	4
合計		18	17	15	8	5	16	78

用例数は実数。-は用例がなかったことを表す。

一方、終助詞のネと共起する形式は、使用数の多いものから順に①副詞（18例）、②断定辞（17例）、③形容詞（15例）、④接続助詞（8例）、⑤名詞（5例）であった。このうち「断定辞＋ネ」のほとんどがショウジによる使用例であるのに対して、「副詞＋ネ」「形容詞＋ネ」「接続助詞＋ネ」は比較的多くの話者によって使われている。ネが後続する副詞で多かったのは「まあ」（5例）と「なるほど」（4例）で、そのほかは「なんか」「たぶん」「ちょっと」が2例ずつ、「きっと」「さすがに」「ぼうぼうと」が1例ずつであった。「形容詞＋ネ」の方は「いい・ええ（「良い」の方言形）」が7例、「すごい」が3例、残りは「長い」「難しい」「眠い」の各1例と形容詞型の活用をする接辞の「～たい」を用いた「やりたい」の1例であった。「接続助詞＋ネ」は「から」（5例）、「けど」（3例）となっていた。

間投助詞・終助詞ともに、ネの前接語に偏りがあるようにみえるが、これにはネの用法がかかわっていそうである。この点も含めてネの用法について次節でみていきたい。

5. ネの用法

5.1. 終助詞としてのネの用法

間投詞・間投助詞・終助詞と、さまざまな形で談話に現れるネであるが、その使われ方には一定の傾向がありそうである。ここでは、まずは終助詞としてのネの用法について記述する。日本語記述文法研究会編（2003: 256）では標準語の終助詞「ね」の用法を①話し手の認識として聞き手に示す、②話し手の認識を聞き手に示すことによって聞き手に確認を求める、③話し手が聞き手を意識していることを示すにとどまる、という三つに大別している。本稿のデータから得られたネの用法を分析したところ、そのほとんどが①の認識提示の用法に当たり、②確認要求や③聞き手への意識の提示に相当するものはそれぞれ1例だけであった。

まずは認識提示の用法の例を挙げる。

（11）［カヨコが人間関係の悩みを語っている］

1181カヨコ：［自分で描いた関係図を指しながら］で、こっちにしといて こうでも、「こうする勇気があるんか？あたしには」とも思うねんけどー、

1182アヤ　：あーー。あ、うーん。

1183カヨコ：もうな、今の自分の気持ちの状態ではなー、

1184アヤ　：うん、

1185カヨコ：こうなろうが こうなろうが両方こうできなくなってんねんやん。

→ 1186アヤ　：あー<u>なるほどネー</u>。　［9714F］

（12）［共通の友人が旅行に行ったという話から］

620 トモカズ：おー。いいなあ でも外国ー 行きたいな。
621 ミツル　：おー飛行機乗ったことないしなー。
622 トモカズ：うそ、
623 ミツル　：ほんまー。
624 トモカズ：んー。
625 ミツル　：乗りたいわ。行く機会がないわー。行く？
626 トモカズ：行こうか。
627 ミツル　：どこ行く？
628 トモカズ：んーじゃあ、あっこ。なに、インドネシア。
→ 629 ミツル　：あ、いいネー。　［9709M］

上例の「なるほどネー」は、話し手が聞き手の説明に納得したことを示す発話、「いいネー」は事態に対する話し手の評価を聞き手に示す発話である。前節でみたように終助詞のネは副詞や形容詞とともに使用される例が比較的多かったが、このように話し手の認識を聞き手に示すという用法で使われている。日本語記述文法研究会編（2003: 257）は「ね」の「話し手の認識として聞き手に示す用法」について「評価や感情を表す述語や、認識のモダリティの形式のように話し手の主観やとらえ方を直接的に表す形式に「ね」が付加されることが多い」と述べている。本稿のデータにおける前接語のタイプの偏りも用法の偏りを反映しているといえそうである。

終助詞のネは、その多くが末尾音を伸ばすネーの形で使用されていたが、伸ばさない形での使用もいくつかみられた。

（13）［タカフミが自分の移住歴を思いだそうとしている］
794 タカフミ：C［地名］やったかなー。親父がCやからなー おかんが、D区ってわかる？
795 ケンイチ：うん。
796 タカフミ：E［地名］んとこ。
797 ケンイチ：あー。
798 タカフミ：うん あっこやねん どっちに住んでたんや、C［地名］やろうな。
799 ケンイチ：何歳でF［地名］行ったん。
800 タカフミ：それもはっきりせーへん。{笑}
801 ケンイチ：あー。三歳ぐらい。
→ 802 タカフミ：きっとネ。
803 ケンイチ：{笑} それぐらい聞いとけよ。親に。　［9701M］

（13）のようなネは、話し手の認識の提示に加えて、それ以上話を展開させるつもりがないというようなニュアンスを与える。（13）では、799行でケンイチが転居当時の年齢について「何歳で」と問い、「はっきりしない」というタカフミの返答を受けて「三歳ぐらい」と具体的な数字で重ねて問うたところでタカフミが「きっとネ」と応じており、これ以上考えるつもりがないことを示すような発話になっている。日本語記述文法研究会編（2003: 257）では標準語における認識提示の「ね」に「反抗的で、突き放したようなニュアンスが感じられる」ことがあると指摘されている。このような「ね」の用法を野田（2002）は「拒絶表明」と呼んでいるが、802行における「きっとネ」もこれに類する用例といえる。タカフミの返答を受けたケンイチが笑って「それぐらい聞いとけよ」とタカフミを非難するような発話をしているのも、「きっとネ」が「拒絶表明」と受け取られたためと考えられる。

同じく「拒絶表明」とみられるものに終助詞「もん」と複合した「もんネ」の例がある。

（14）［ケンイチが会話収録のためのフェイスシートに情報を書いている］

606ケンイチ：G市ってある。

607タカフミ：知らん、初耳やけどな。

608ケンイチ：G町かな あれ。…なんか、G［地名］、で生まれたんやけど。［調査者には］わかるかな。

609タカフミ：でもお前の過去についてそんな詳しく聞く気はないと思うから、どうでもいいんちゃう。

610ケンイチ：{笑} ええかな。

611タカフミ：うん。

612ケンイチ：ほんで、

613タカフミ：ちょ「H」［別の地名］って書いとけや。{笑}

→ 614ケンイチ：{笑} <u>ちがうもんネ</u>。　［9701M］

「もんネ」の用例はケンイチによるこの1例しかなかったが[4]、このネはナに置き換えられないという点で注目に値する。他の用例におけるネは、ニュアンスの違いはあっても基本的にナとの互換性があるが、「もんナ」には「拒絶表明」の用法がなく、「もんネ」によってしかこれを表すことができないのである。このことは、標準語の「な」「ね」に対応するとされてきた関西方言のナが、「な」「ね」のすべての用法をカバーする形式ではない可能性を示唆している[5]。本稿では詳しい検討をする余地がないが、ナの用法についてはあらためて考える必要があるだろう。

続いて、終助詞ネの認識提示以外の用法についてみておきたい。①確認要求のネの用例は次の1例だけであった。

（15）［部活で、自分たちの演奏曲が他のグループと重なりそうだと話している］

950ショウジ：［重なっても］いいやん。

951タカシ　：えー や、まあねー。自分［＝ショウジのこと］I［曲名］のソロ［担当］やろ？

952ショウジ：うん。

953タカシ　：あのバンドやった［ら］［ソロは］Jちゃんやで I［曲名］。

954ショウジ：あー。

955タカシ　：きついやろ？ {笑}

956ショウジ：いいで別に。

957タカシ　：あ ほんま {笑}

958ショウジ：いいよ、いいよいいよ？うわ、こんな強がっていいのだろうか {笑} え というか しゃあないやんなー。

→ 959タカシ　：新曲大丈夫かなー。K［曲名］。あとでしますけど。練習しといてネ。

960ショウジ：う、うん、{笑}

961タカシ　：いけるやろ。

962ショウジ：わかりました。　［9708M］

上例（15）ではテ形による行為指示表現とともにネが使用されている。タカシはショウジが所属している音楽グループのリーダーであり、二人のあいだには「親しい友人どうし」のほかに「リーダーとメンバー」という関係性もある。959行におけるタカシの丁寧体使用は、自身が指導的立場にあることを示すためのものと考えられるが、それに続くかたちでネを伴った行為指示表現が使われている。ナよりも文体的に高いネが、普通体をデフォルトとする会話におけるアップシフト（千々岩2016）の一環として使用されているのである。ネの文体的価値を利用した談話的な効果を狙った例といえるだろう。

③の聞き手を意識していることを示す用法では「ね」はノダ文とともに使用される（日本語記述文法研究会編2003: 259-260）。これに相当するネの用例は次の1例だけであった。

（16）［物理や化学でなく生物の科目で受験できる大学が少ないという話から］

→608ショウジ：L［大学］の教育［学部］とか受けてんのネ 生物だけで {笑}

609タカシ　：なんでやねん。

610ショウジ：なんかわからんけど。　［9708M］

関西方言のノダ相当形式にはネンやテンがあるが、③の用法には基本的にこれらを用いたネンナ・テンナという形式が使われるものと思われる[6]。以下にその一例を挙げておく。

（17）→1145カヨコ：前のーそう、何年か前のこの この人のいろんなー、行動に対する

なー、そのな 礼儀やと思うネンナー、
1146アヤ　：うんうんうん、
→1147カヨコ：すごく あたしが後悔してるー、気持ちを表す場やと思うネンナー、
1148アヤ　：うんうんうん、　［9714F］

ここまで、終助詞のネの用法についてみてきたが、関西方言話者のカジュアルスタイルに使われるネには確認要求の用法としての使用がほぼみられないという特徴のあることがわかった。また認識提示の用法のうち「拒絶表明」にかかわる「もんネ」については、「もんナ」に置き換えることができないという点を指摘した。

5.2. 間投助詞・間投詞としてのネの用法

では次に、間投助詞・間投詞のネにおける用法についてみていきたい。日本語記述文法研究会編（2003）は間投助詞に相当するものを終助詞の間投的用法と扱っているが、「ね」の間投的用法については「聞き手を意識しながら話しているということを聞き手に示す」（p.260）ことがその役割であると述べている。しかしながら本稿のデータでは、間投助詞のネも「話し手の認識として聞き手に示す」という終助詞ネのもつ用法を引き継いでいるように見受けられた。次例をみられたい。

（18）［部活で新入生に貸し出す楽器の悪臭について話している］
566ケンイチ：おー。昨日貸した あのー、M、M、かなんか Mなんとかちゅうやつに貸したやつもくさかったよなー。
567タカフミ：どれ？
→ 568ケンイチ：えーとネー…たしか あのNさん？
569タカフミ：ん？
570ケンイチ：O［部活のグループ名］の。
571タカフミ：あー あー。
572ケンイチ：あー。ボーカルの人が使ってたやつ、が あんねんやんか、
［9701M］

（18）のネは情報検索中であることを示すフィラー「えーと」とともに使われている。4.3節において、間投助詞ネがフィラーの形式と結びついて使用される傾向のあることをみたが、これも「心内で確認しながら、話し手の認識として聞き手に示す」（日本語記述文法研究会編2003: 256）という標準語の終助詞「ね」のもっている基本的な意味とかかわりがあるのではないかと思われる。総じてネには聞き手に注意喚起を促すような例が少なく、間投助詞でも聞き手への認識提示と呼べそうな例が多い。聞き手を意識していることの表示として間投助詞ネが使用

される例もないわけではないが、用例が少なく話者も限られていた。

（19）［「言葉狩り」の問題について話している］

488ハツミ：で昨日やっと［クレームの手紙を］読んでー、だってなんかQ君のコーナーもなんか、なんかね、すごくあたしは引っかかったのがなんか「ボケる」、てゆか「ボケる」とか、「天パー」［注；「天然パーマ」］とかいうのは、「差別語である」とかゆって、でその、Q君のゆってた「ボケる」ってゆのがボケとツッコミの「ボケる」やねんかー、

489サヤカ：うん、

490ハツミ：それもあかんねやった［ら］ど、なに す、どうなるん大阪の、テレビ放送は、とか思ってー。

→ 491サヤカ：え、でも、……それ、って<u>でもネ</u>？

492ハツミ：んー、

→ 493サヤカ：<u>放送をやってるかぎりネ</u>、

494ハツミ：んー、

495サヤカ：そういう、苦情とかー、

496ハツミ：んー、

497サヤカ：そういうのは なくならへんのんちゃうん、

498ハツミ：んー

499サヤカ：テレビにしてもそうやんーー。　［9713F］

（20）［昼食に買ってきたおにぎりを取り出している］

→ 17チズル：{笑} イクライクラ。<u>イクラとネ</u>、<u>チキンマヨネーズとネ</u>、なんか {笑} でもこんな［会話を］録ってる時うち、食べ物の話しかしたことない {笑}

18アユコ：なんか、「これ新製品やねん」とかな {笑}　［9710F］

このような例が少ないことは、終助詞ネが確認要求や同意要求の用法でほぼ使われていないことと並行的といえる。間投助詞にせよ終助詞にせよ、関西方言話者のカジュアル談話におけるネは聞き手に積極的に反応を求めるものではないといえる。

なお間投詞のネの用例は3例あったが、そのうち2例は（21）に挙げるような間投助詞とも取れる例であった。残りの1例は話し相手の「そうやんネー」という発話に応える形で使用されていた（用例（22））。

（21）［部活の練習について］

1295リイチ　：［中略］いやー そっかー。みんな ちょー［＝ちょっと］テスト中や

かー［＝から］なかなか厳しいやろなー。

1296カズヨシ：ほんまやなーー。いや ちゅうか もう終わったけどなー。

→ 1297リイチ　：でもまあ とりあえず、ネー。形だけでも。

1298カズヨシ：んー。

1299リイチ　：「こんな感じで行きますー」ってー。　［9705M］

（22）［アルバイトをする余裕がないことについて］

869ナツコ：なんか実験して帰ったらさ、もうなんか、

870チカ　：あー、

871ナツコ：なー、

872チカ　：そう＊＊＊＊＊＊［聞き取り不明］

873ナツコ：もうなんにも、なんにもしたくないって｛笑｝

874チカ　：そうそうそう。

875ナツコ：であと食べて寝るだけって感じや｛笑｝

876チカ　：そうそうそうそうそう、絶対そうなるー。

877ナツコ：もうな、土日は、かといって土日は遊びたいし｛笑｝

→ 878チカ　：んーー。そうやんネー。

→ 879ナツコ：ネー。でも遊ぶお金はどこから出てくる｛笑｝［9712F］

いずれも、間投助詞と同様、聞き手の反応を積極的には求めないような使い方である。野田（2002）が指摘するように確認要求や同意要求といった聞き手の反応を求める用法は標準語の「ね」における典型的な用法であるが、関西方言話者のカジュアルスタイルにおけるネはむしろ聞き手の反応を要求せずあくまでも話し手の認識提示にとどまる用法に偏って使用されている。

6. ネを多用する話者の特徴

ここまで、ネの使われる言語内的な条件や用法上の偏りについて整理してきたが、本節ではネを多用する二人の話者に注目し、二人にみられることばの志向性について考えたい。

ネの使用率がナのそれを上回った唯一の話者がサヤカであるが、彼女の内省報告では話し相手のハツミと話すときは「関西弁」を使っているとのことだった。たしかに彼女の発話には関西方言形もみられるが、全体に標準語形の使用が目立つ。以下にいくつか例を挙げる。

（23）うん、そうだね、そうだね、　［745サヤカ：9713F］

（24）どうなんだろう。　［535サヤカ：9713F］

（25）うん［そういう意見が］あるっていうのだけー、わかっとけばいいんじゃない。

［561サヤカ：9713F］

（26） え 木曜さー、一限［の授業］が絶対取らなくちゃいけなくってー、

［35サヤカ：9713F］

（27） なんかね、よくわかんないけど。 ［239サヤカ：9713F］

サヤカの発話には（23）～（27）のそれぞれの形式に対応する方言形の使用もあり、標準語形だけが使用されているわけではない。しかしながら他の話者の多くが方言形だけを使用するこれらの言語項目で標準語形を併用しているところにサヤカの特徴がある。すなわち、サヤカのネの多用は発話全体における「方言形と標準語形の併用」のなかで生じているといえる。

もう一つ、サヤカの言語使用で注目したいのは自称表現である。サヤカは自称詞として自分の名前をベースにした「サーちゃん」という愛称を使っている。このようなタイプの話者は今回のデータではサヤカだけであった。インフォーマルな場で自分の名前を自称詞として使う若い女性が関西で増えつつあるという指摘が村中（2018: 159）にあるが、1997年当時の大学生であるサヤカの自称詞使用は、当時としては少数派でも変化の先端を行っていた可能性がある。

続いて、サヤカに次いでネの使用が多かったショウジだが、彼もまたサヤカと同様に親しい友人タカシと話すときのことばを「関西弁」と内省報告している。しかしやはりショウジの発話には、他の話者にはみられない標準語形が散見される。

（28） や なんかね だから、あるじゃない、どういうの、これができないからー、どういうの、だ［から］これができないからこういう練習をしよう、いうことで その、合奏の、間で、なんか、別の練習を、組む。 ［1010ショウジ：9708M］

（29） あー、そうかそうか。あれ一回ねー困ったよーあの住民票移してない、ってー、この前 財布なくしたからー、あのー あれやねん あのー、銀行でさー、キャッシュカードー、の、を、新しく、再発行するときにー、住所証明できるものがいるのよー。

［702ショウジ：9708M］

（30） あー ｛笑｝ はいはいはい え 教科書とかはあるんでしょ？

［464ショウジ：9708M］

サヤカのケースと同様ショウジも方言形と併用するかたちでこれらの標準語形を使用している。加えて、ショウジの発話にはアップシフトの用例も複数回みられる。

（31） ［テスト開始直後に諦めて出て行ってしまうクラスメイトがいると聞いて］

172ショウジ：あー んでー出て行くん さっさと、んー でも それ もう、捨てたも同然やん。

173タカシ ：うん。

→ 174ショウジ：じゃ落ちるでしょうな。｛笑｝ ［9708M］

（32）［共通の友人の話から］

356 ショウジ：なんか ごっつい バイトして海外旅行、行く ゆーてから だからお金は貯めとったらしいよな。

357 タカシ　：来年 海外旅行 行きたいねんけど 行けるかなー。

358 ショウジ：無理やろ。

359 タカシ　：夏休み行きたいねんけどなー。

→ 360 ショウジ：あー、えー？ {笑} 夏休みですか？　［9708M］

（33）［コンピュータ教室で習っている内容について］

554 ショウジ：や、全然そんな だからもう、＊＊＊［聞き取り不明］で、しぼってる、なんか。業務用やから一応。

555 タカシ　：C［言語］にしようやC。

556 ショウジ：知らんが、{笑} なんか、そ だから、たぶんその、企業とかでー、

557 タカシ　：うん、

→ 558 ショウジ：実際に使う、には、いいんじゃないですか。［9708M］

（34）［学期末テストの話］

735 タカシ　：実は英語嫌い。あ そや、おれ語学落としたかもしれんねや。おれ両方やばいねん。

→ 736 ショウジ：えー、そんなんいいんですか？　［9708M］

（35）［共通の友人が新しく組んだバンドについて］

1069 タカシ　：楽しみやなー。

1070 ショウジ：楽しみやで。

1071 タカシ　：どういう組み合わせやねん いうようなコンボ［＝グループ］や {笑}

→ 1072 ショウジ：うんうんそうですね、だからそう全然なんか、［･･･以下略］

［9708M］

標準語形の使用にしてもアップシフトにしても、発話全体からみるとさして頻繁に起きているものではない。しかしながら他の話者が基本的に方言形だけを使用する言語項目における標準語形の併用や他の話者に比べて相対的に頻度の高いアップシフトなどが、ショウジの話し方をていねいなものと印象づけている。ちなみにショウジの使用する自称詞は「ぼく」で「おれ」や他の人称代名詞の使用はみられない。また話し相手に対しては「きみ」を呼称に用いている箇所があった（話し相手のタカシはショウジへの呼称に「じぶん」を使用している。用例（15）を参照）。村中（2018: 158）はフォーマル場面でも使われる「ぼく」に対して「おれ」はインフォーマルな場面に使用が限定されるとし、関西でも「ぼく」と「おれ」に文体差があると述

べている。対称詞については「おまえ」を「ほぼ男性語」であるとしている。ショウジが「おれ」「おまえ」ではなく「ぼく」「きみ」を使用している点もていねいな印象とつながっているところである。

以上述べてきたように、サヤカとショウジにおけるネの多用は、標準語形と方言形とが対になっている言語項目における両者の併用という全体の傾向のなかで現れたものであった。これを「標準語志向」と呼んでよいかどうかは検討の余地があるが、少なくともこの二人に関しては他の話者よりも標準語使用の頻度が相対的に高いということが共通点として挙げられる。

ネの使用率が10％に満たなかった15名の話者には、他の言語項目における標準語形と方言形の併用はほとんどみられない。したがってサヤカとショウジのネの使用とその他の15名の話者におけるネの使用とは異なる動機によって支えられているといえるかもしれない。すなわち、前者にとってのネがナとの交替可能な自由変異として存在するのに対して、後者のグループにとってのネはナで表すことのできない用法を担う語形として存在しているのではないか。関西方言のナのもつ用法を再検討したうえで、このことについてあらためて考える必要がある。

7. まとめと今後の課題

本稿の目的は、関西方言話者のカジュアルスタイルにおけるネの使用実態を明らかにすることであった。談話資料を用いた量的な分析から、本稿では以下のことを指摘した。

（a）全体的な傾向（4.1節）

- ネの使用には個人差があるが、多くの場合その使用率は10％未満である
- 12談話中10の談話において少なくとも1例はネが使用されている

（b）言語内的な条件（4.2節、4.3節）

- ネは、間投助詞もしくは終助詞として使用され、間投詞としての用例は少ない
- 複合形式としてのネの使用は限定的である
- 間投助詞のネに多い前接語：フィラー＞とりたて助詞＞接続詞
- 終助詞のネに多い前接語：副詞＞断定辞＞形容詞＞接続助詞＞名詞

（c）用法上の特徴（5節）

- 話し手の認識を聞き手に示す用法が中心である
- 聞き手に反応を求める用法での使用はほとんどみられない
- ネにはナがもたない用法がある可能性がある

（d）話者の特徴（6節）

・ネを多用する話者は全体的にカジュアルスタイルにおいて方言形と標準語形を併用する傾向にある

・ネを多用する話者にとってネとナは自由変異となっている可能性がある

以上、これまで注意が払われることのなかったカジュアルスタイルにおけるネの使用について本稿の分析によってその概略を把握することができたといえるが、残された課題も多い。一つは関西方言のナの意味記述である。これまでは標準語の「な」「ね」にあたるとしてそれ以上の分析を行っていなかったが、ナがどのような終助詞であるのかを今一度考えてみる必要がある。そのうえでカジュアルスタイルにおけるネとナの機能分担のあり方を詳しく分析することが求められる。また今回は筆者の手元にある関西の大学生の会話データのうち一部だけを分析に用いたため、データ全体について今回明らかにしたことがどの程度あてはまるかを考えてみたい。発展的な課題として現代の若年層や談話収録当時大学生年代だった人たちの現在のネの使用なども視野に入れ、引き続き研究していきたい。

注

1） 各府県の執筆担当は次のとおり（敬称略）。滋賀県：筧大城、京都府：奥村三雄、奈良県：西宮一民、大阪府：山本俊治、兵庫県：岡田荘之輔・楳垣実。

2） 以下、用例は原則として漢字仮名交じりで表記し、文脈やことばを補ったり、語句の意味を説明したりする際には［　］に入れて記す。個人情報にかかわる語句についてはA、Bなどと表記している。話者IDについては3節を参照されたい。

3） 用例末尾には談話IDを付す。IDの詳細については3節を参照のこと。

4） 「もん＋ネ」の例はもう1例あるが、以下に示すとおり「もんネー」と末尾音が伸びており（14）の「もんネ」とは使われ方が異なる。

〈1〉599サヤカ：うんうん。{笑} Q君て けっこう落ち込みそうやもんネー。［9713F］

5） たとえば日本語記述文法研究会編（2003: 257）に挙げられている次のような例でも「ね」をナに置き換えることができない。

〈2〉A「そろそろ仕事に戻りなさい」

B「嫌だね」

B'「??嫌やナ」

6） ネンナ・テンナの用法については野間（2019）に詳しい。

参考文献

楳垣実編（1962）『近畿方言の総合的研究』三省堂.

尾崎喜光（2003）「用法に地域差が伴う言語表現に対する相互評価：関東と関西の比較」『社会言語科学』5-2: 58-73、社会言語科学会.

篠原玲子（2005）「間投助詞のスタイル切換え：方言間の対照研究」『阪大社会言語学研究ノート』7: 39-50、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

高木千恵（2006）『関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相』（『阪大日本語研究』別冊2）、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

千々岩宏晃（2016）「スピーチスタイルアップシフトの会話分析を用いた研究―日本語の雑談における反応要求の技法―」『日本語・日本文化研究』26:115-126、大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻.

野田春美（2002）「第 8 章　終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『モダリティ』、pp.261-288、くろしお出版.

野間純平（2019）「大阪方言の平叙文における「ネンナ」―「ネン」に固有の意味特徴―」『阪大社会言語学研究ノート』16: 35-54、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

細谷書子（2004）「大阪市方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』6: 42-63、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

村中淑子（2018）「関西弁の自称詞・対称詞」真田信治監修『関西弁事典』、pp.157-160、ひつじ書房.

参照ウェブサイト

国立国語研究所　方言文法全国地図PDF版ダウンロードサイト
http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdF/gaj-pdF_index.html（2020年2月2日閲覧）